

5 頸髄損傷者の復学・就学支援についての一考察

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局 自立訓練部 機能訓練課 植木朋子(CW)

阿部真市(CW) 市川眞由美(PT) 輪竹一義(PT) 田中 匡(OT) 森田奈々(OT) 菅野博也(CW)

1. はじめに

自立支援局における自立訓練（機能訓練）の進路として大学への復学・就学を果たした頸髄損傷者の4事例をケース記録、訓練記録などから要因分析し、支援に共通する点を抽出し、考察を行ったのでその報告を行いたい。

2. 具体的な支援の内容

(1) 住環境整備

予め住居が確定していない場合、住宅確保が最優先課題となる。大学から通学可能な範囲内で復学・就学時期の3ヶ月前を目安に住居の確保を目指す。改修内容は、同居人の有無、物件の構造、ADLの状況に合わせて検討を行う。復学の場合、残りの在学期間や経済面等も考慮し、改修をせず、居宅介護の利用を選択することもある。

(2) 学内の環境整備

早期に学校訪問を行い、環境面の調査を行う。大学側への協力依頼は具体的な回答を得るため、環境整備のポイントをまとめた文書を提出している。学内の主な整備箇所としては、講堂(教室)、机、トイレ、着替え場所、医務室、駐車場、空調、動線（通路幅、段差、ドア）などが挙げられる。

(3) 学内のサポート体制の整備

ボランティアの活用、医務室の看護師の協力、同級生への介助依頼等の確認を行う。

(4) 通学手段の確保

自家用車、電車・バスなどによる通学手段を確保し、必要に応じて通学経路の確認を行う。

(5) 本人の調整力や行動力のエンパワメント

本人自身が大学側と様々な調整を行う必要があるため、障害状況について自ら説明ができること、授業の受け方やレポート提出方法、試験時間の配慮、実習単位の置き換えなど、自らが調整できる力を備える支援が求められる。

(6) 生活スケジュールの組み立てと地域のサポート体制整備

講義時間が決まったら入浴、排便などの大まかな生活スケジュールを組み立てる。その上で、居宅介護サービス（家事援助、身体介護）、訪問看護、緊急時の医療面体制について地域関係者を集め、地域ケア会議を開催し、本人に対する地域生活のサポート体制を整える。

3. まとめ

頸髄損傷者が受傷後新たな環境での生活を開始するためには、障害特性に合わせ、ソフト、ハード面にわたるきめ細やかな支援が必要である。特に高等教育は自ら望んで学ぶものであり、学校側の受け入れ姿勢も様々であるため、本人が種々の調整や準備に主体的に関われるよう心がけている。さらに、復学・就学支援は学生生活開始までの関わりに過ぎないため、その後の様々なアクシデント等に備え、本人自身が調整力を持てるような社会面の支援とともに、地域ケア会議などを通じた地域のサポート体制づくりも安定した大学生活を継続するために大切な点である。